

## サムエル記下 21 章 1～14 節

2025 年 12 月 3 日(水)

はじめに

本日の 21 章から 24 章まではダビデ王治世下に起こったことを語っていますが、サムエル記下の後半に入るわけです。そこで少しサムエル記上下の大筋を振り返っていきます。

イスラエルは、神を王とする 12 氏族連合体でした。しかし外敵の度重なる侵入をきっかけに君主制国家に変貌します。その経緯を語るのがサムエル記上下です。この時の最大の問題は、それまで神がイスラエルの王であったのに、君主制国家では人間が王となるということです。神が王であることを否定しかねないのです。そこでどうするのかということです。

そこで、イスラエルの民は君主制国家を創出するとき、世俗の国家と違って、人間の王は真の王である神の御心に従う存在でなければならないとしました。そのためサムエル記上下は、初代王であるサウルも、二代目の王であるダビデも、神の御心に従う存在かどうかを問題にしているわけです。初代王サウルは神の御心に背いたため退けられ、ダビデが改めて王として立てられるわけです。むろんダビデも、神の御心に背くのですが、その罪を神に率直に告白するという点で、サウル王は違っていただけです。

以上のような大筋の中で、サムエル記上下は、これまで「ダビデ台頭史」という伝承をもとにしていました。ダビデが王となる歴史を語っているわけです。

しかし本日の 21 章～24 章はダビデが王となり、その治世下で起こったことが、以下の四つ語られています。

- ①ダビデ治世下の大飢饉
- ②ペリシテ人との戦い
- ※ダビデの感謝の歌と最後の言葉。
- ③ダビデの勇士たちの紹介
- ④ダビデの人口調査という罪

それら四つの記事は、ご覧のように、※の 22 章 1 節～23 章 7 節のダビデの感謝の歌と最後の言葉を中心にし、その前後に配列されています。

本日は、21 章 1～14 節の「飢饉とサウルの子孫」という記事を学びます。ダビデ王治世下に起こった大飢饉に関する記事です。

## I サムエル記下 21 章 1～14 節の話の流れ。

では、サムエル記下 21 章 1～14 節までの話の流れを見てみましょう。

①まず 1 節です。ここではダビデの世に、三年続いて飢饉が起こったことがいわれます。三年続きですから、大飢饉です。聖書は、その被害状況を語りません。それは言わずもがなということかもしれませんが、すでに創世記で語られているからでもあります。アブラハムもヤコブも飢饉を経験したわけです。アブラハムは「約束の地」が飢饉になったとき、サラと共にエジプトに逃れます。またヤコブとその 11 人の息子たちは、飢饉になったとき、やはりエジプトに逃れ、そこでヨセフの保護のもとで過ごすわけです。

そこで飢饉の中で、ダビデは主に託宣を求めています。祭司たちがいますが、彼らに神の御心を問わせるのではなく、自らが主なる神の御心を求めたわけです。ここにイスラエルの

王の独自性があるといつてよいのです。イスラエルの王は、神の御心に従って統治する者だからです。

そうすると主なる神は「ギブオン人を殺害し、血を流したサウルとその家に責任がある」というのです。つまりダビデは先王の罪責を負うわけです。ところでこのサウルの非道については、サムエル記には載っていません。サムエル記も参考にしたと思われる「先見者サムエルの言葉」、「先見者ナタンの言葉」、「先見者ガトの言葉」にも載っていなかったと思われます(歴代誌上 29 章 29 節参照)。けれども、記録に載っていないからといって、ギブオン人に対するサウルの非道という事実はなかったことにはなりません。記録と事実の、このようなズレについては、今日、意識的である必要があります。情報には記されていないからと言って単純にその事実は無かったとは言えないわけです。そもそも情報を構成する人間の言葉は現実の一部を語るができるだけだからです。特に、このテキストのように、具体的に被害者がいる場合、被害者の言葉に耳を傾ける必要があります。実際、ダビデは、神の御心に従ってギブオン人から話を聞くことにするわけです。

②2～6 節。そこでダビデはギブオン人を招きます。2 節後半は、ギブオン人についての説明です。その中で、先王サウルが不当にギブオン人を討とうとしたことがあった、ということがいわれます。それを受けて、3 節でダビデ王は、償いを申し出ています。しかし 4 節では、ギブオン人たちは、サウル王の非道を語った後、その子孫の中から 7 名を自分たちに渡すようにいいます。それは、サウルの町ギブアで、「主の御前に彼らをさらし者にする」ためです。

③7～9 節。ダビデはギブオン人の話を受け入れます。そこで、サウルの側女リツパの子であるアルモニとメフィボシェトの 2 名、それからサウルの娘ミカルとアドリエルとの間に生まれた五名、合わせて 7 名をギブア人に引き渡しました。そこでギブオン人は彼らを一度に処刑し、「主の御前に彼らをさらし者」にしたのです。

④10～14 節。この悲劇の後、リツパは収穫の初めころから、死者たちに雨が天から降り注ぐころまで、さらし者にされた遺体を鳥や獣から守りつづけました。

ところでこの話がダビデに届き、ダビデは、サウルとヨナタンの遺骨をヤベシュの人々から受け取り、ベニヤミンの死ツェラにあるサウルの父キシユの墓に葬りました。この時、7 名も一緒に葬ったわけです。この後、神はこの国の祈りにこたえ、飢饉が終わるのです。以上を箇条書きにします。

①1 節      ダビデ治世下の大飢饉

②2～6 節      ダビデ、ギブオン人を招き、話し合い、先王サウルの子孫七名を犠牲にすることで合意する。

③7～9 節      ギブオン人、サウル王の子孫七名主なる神への犠牲として献げる。

④10～14 節      サウルの側女リツパ、7 名の遺体を守る。

またそれをダビデが聞き、サウルとヨナタンの遺骨をヤベシュから持って来て、7 名の遺体と一緒に、サウルの父キシユに墓に葬る。こうして飢饉が終わる。

## Ⅱ. サムエル記下 21 章 1～14 節の解説

### 【1 節】

ダビデ王の治世に大飢饉が起きました。「三年続いて」とあります。これは、飢饉が終わった後、振り返って言えることでしょう。しかし当時は、飢饉が国をすっぽりと覆い、いつまで続くか分からない、ということだったわけです。今も未来も飢饉に覆われているように思うわけで、いわば「永遠の飢饉」です。だからこそダビデは、主なる神に御心をたずね求めたわけです。未来を開くのは神だからです。ダビデは、14 節を参考にすると、イスラエルの人々の代表として主なる神に尋ねたわけです。

すると主なる神は、ダビデに対して「**ギブオン人を殺害し、血を流したサウルとその家に責任がある**」というのです。先王の罪責を引き受けるようにということなのです。こうしてはじめてダビデの王国は、サウルの王国からの歴史的な連続性を持つことが明確になるからです。逆に言えば、先王サウルの罪責を引き受けず、自らと関係がないとしてしまうと、神が、イスラエルを君主制国家にするという御業の歴史から乖離していまい、早晚、世俗的な国家と同じになってしまうのです。そうならないために、神はダビデに先王の罪責を引き受けるように求めているのです。

### 【2～6 節】

そこでダビデ王は、ギブオン人を王宮に招き、彼らと協議するわけです。2 節では、ギブオン人についての説明で、三つのことがいわれています。

①ギブオン人は、イスラエルの民ではなく、アモリ人の生き残りである。

②しかしギブオン人は、ヨシュアの時代イスラエルと戦うのではなく、和平を講じた。その時以来、ギブオン人はイスラエルの人々と誓約を結び、主に、下働きをする者となった(ヨシュア記 9 章参照のこと)。

③ところがサウルは、その誓約を破り、ギブオン人を討とうとしたことがあった。

以上のような説明がなされます。こうして大飢饉は、単なる異常気象ではなく、明らかにイスラエルの不義に対する神の裁きであることが明確となります。ここから話は、罪をいかにして贖うのかということがテーマになるのです。

そこで 3 節でダビデ王は、ギブオン人に対して、どのような償いをしたらよいのかを聞いています。するとギブオン人は、次のように応えます。

①償いは、金銀で解決できない。

②しかしイスラエルに対して報復するというのもない。

そこでダビデは、ギブオン人に対して「**言ってくれば、何でもそのとおりにする**」とといいます。こうしてはじめてギブオン人は、自分たちの受けた被害と悲しみを率直に告げています。

①先王サウルは、ギブオン人の絶滅をはかった。

②先王サウルは、イスラエルの領土のどこにも定着できないようにした。

③そこでサウルの子孫のうち、7 名をギブオン人に引き渡して欲しい。サウルの町ギブアで、**「主の御前に彼らをさらし者にします。」**そのように言うのです。

ここで問題になっているのは私的な報復ではなく、誓約を破ったという罪に対する刑罰を求めているのです。こうして神に対する罪が贖われ、主なる神の義が回復されるからです。

### 【7～9 節】

ダビデ王は、ギブオン人の言うことを受け入れました。しかしサウルの子孫のうちヨナタンの子メフボシエトを引き渡すことはできません。ダビデは主なる神の前でヨナタンと契約を結んでいたからです。

そこでダビデは、サウル王の側女アヤの子リツパの息子たちアルモニとメフィボシェットの 2 名を引き渡します。またサウル王の娘ミカルとアドリエルとの間に生まれた 5 人の子供 5 名を引き渡します。

ところでサムエル記上 18 章 19 節によれば、「サウルの娘メラブはダビデに嫁ぐべきときに、メホラ人アドリエルに嫁がせられた」とあります。また 25 章 44 節には「サウルは、ダビデの妻であった自分の娘ミカルを、ガリム出身のライシュの子パルティに与えた」とあります。さらにサムエル記下 3 章 16 節では、ダビデがミカルを取り戻したとき「パルティエルは泣きながらミカルを追い、バフリムまで来たが、アブネルに「もう帰れ」と言われて帰って行った」とあります。これらの記事からすると、ギブオン人に引き渡されたのは、メラブの息子たちということになります。

では、何故、ここでは「サウルの娘ミカル」というのか。一つは、誤記ということですが。しかし果たしてそうでしょうか。ミカルは、もともとダビデを愛していました。しかし複雑な事情が重なり、ダビデを軽蔑するようになっていました。時に、神の箱をエルサレムに運び上げるとき、ダビデが裸で踊ったことに対して、「空っぽの男」とさえいっていました(Ⅱサム 6 : 20)。そこでミカルについて次のように言われていました。「サウルの娘ミカルは、子を持つことのないまま、死の日を迎えた。」(Ⅱサム 6 : 23)。仮にミカルが姉メラブの 5 名もの息子を育てることに関わることがあったとしても、それを失ったということではないでしょうか。ここにあるのは、ミカルへの批判なのです。

ともかくギブオン人は、サウルの子孫 7 名を処刑し、主の御前にさらしものにしました。つまり正義が実現されたことを、神と人に示した、ということです。

#### 【10～14 節】

ところでアヤの娘リツパは、このサウルの子孫の 7 名の遺体を鳥や獣から守ったということです。それは「収穫のころから、死者のために雨が天から降り注ぐころまで」のことでした。イスラエルの気候は雨期と乾期の二シーズンです。雨期は 11 月頃から翌三月頃までです。ですからリツパは、おそらく 9 月から 11 月頃まで遺体を守ったのでしょう。

尚、彼女が「粗布を獲って岩の上に広げた」というのは、どういう意味なのかよく分かりません。彼女は悔い改めを示す「粗布」に座って 7 名の遺体の側にいたことを示そうとしているのかもしれない。

ともかくリツパの行動は、ダビデ王に伝わりました。そこでダビデ王も彼女にならって哀悼をしめすのです。サウルとヨナタンを丁寧に葬ることにし、そのため彼らの遺骨を、ヤベシュから持ってきて、7 名の遺体と一緒に、サウルの父キシユの墓に埋葬しました。

聖書は、こうした一連のことがあって、主なる神が祈りに応え、飢饉を終わらせ、雨をもたらしたということです。サウルの罪が取り除かれたからです。

先王の罪責を負うとは、具体的に、サウル家の関係者 7 名の命を奪うことでした。神に対する罪を贖うのは、水に流すようなことでは不可能であって、命が必要なのです。

しかし今、幸いなことに、神自らがイエス・キリストの死において罪の贖いを成し遂げてくださいました。この恵みの事実立つことが大切なのです。それなしには、たとえどんなに罪責を負うことを求めて叫んだとしても、それは出来ないからなのです。